



丸山健人 著

**高層の天気**

—700ミリバール天気図の

見方・書き方—

岳書房, 1979, 四六版, 158頁,  
800円

本書は山の愛好者のために書かれた入門書であるが、気象に興味を持っている一般の人にとっても良い手引きとなろう。日本短波放送（ラジオたんぱ）が1978年6月から高層気象通報を再開し（2, 3, 9, 10月は休止）、日刊赤旗紙上には1978年6月末から、700 mb 天気図が解説と共に（当初は月、水、金の週3回、1980年1月からは毎日）掲載されるようになった。これに伴い、1978年10月から1年間、月刊誌「山と仲間」に著者によって連載された「高層天気図の利用法」を集成したものがこの本であり、700 mb 天気図の見方・書き方のポイントが述べられている。「何よりも実際に高層天気図を見てもらい、自分で書いていただきたい」というのが著者の意向である。

内容は大きく分けて三つになる。第1は「高層天気図を見てもらう」ことに関するもので、次の各章（順不同）がこれにあたる。

高層天気図とは—基本的な気圧配置、気圧の谷・低温域・強風域に注意。

上空の気温—低温域の移動を追跡、大雪・雷雨に注意。

上空の偏西風—（高・低気圧の）進路予測の手がかり、南北温度差と（地球の）自転。

上空の気圧の谷—谷の前面の低気圧は発達、南西風に注意。

上空の前線—等温線のこんだところ、弱い前線にも注意。

不安定な大気—暖かく湿った空気は上昇しやすい、雷が起きやすい状態は持続する。

各章の見出しのあとに付記した、それぞれの章の小見出しから伺えるように豊富な内容が、多くの図を交えて簡潔に分りやすく説明されている。巻末に1年間153枚もの700 mb 天気図（解説つき、赤旗紙からのコピー）を載せて、理解をいっそう深めるように企画されている点は、本書の大きな特長といえよう。

第2は「実際に高層天気図を書いてもらう」ことに関

関する部分で次の各章がこれにあたり、事例を用いて具体的に説明されている。

高層天気図の書き方—はじめての人にもやさしい高層天気図。

高層の風・地衡風—気圧傾度とコリオリ力のつり合い、複雑な山での風。

書き方講習会の開き方—講師は誰がやるか、準備は？

当日は？ 等々。

ラジオたんぱで放送された資料が練習用サンプルとして載せてあり、グループでも個人でも手軽に練習できるように配慮されている。ラジカセが普及している今日では、毎早朝の資料の入手も簡単であるから、本書の知識をもとに、上空にくりひろげられる高層気象のドラマをより深く知ることもできよう。

第3の部分は、うへの主たるテーマに関連して特徴的な気象現象、高層気象観測と資料、ラジオによる気象通報の歴史などについて興味ある事柄が述べられている。大気の長波—長波が見やすい500 mb 天気図、2週間も追跡できる。

ジェット気流—季節推移の指標、梅雨前線との対応。

台風—太平洋高気圧の南側ではゆっくり移動する、偏西風帯に入るとはやまる移動速度。

高層気象観測—ラジオゾンデ観測、1日2回全世界いっせいに。

もっとくわしい高層天気図を手に入れるには—気象模写放送、印刷天気図、国際気象通報式。

ラジオ天気図の半世紀—漁業気象がはじめ、気象の暗黒時代、気象を平和と国民のために、高層天気図の時代、ほか。

著者のねらいは冒頭に記したとおりで、その意図は少ない紙面にもかかわらず十分に読者に理解されよう。ただ、高層天気図上での温度移流に関する説明がないことや、高層天気図と地上天気図との関係についての解説が、極めて少ないことなどが気になる。地上天気図から高層の気象を推定し、あるいは高層天気図から地上天気図上のじょう乱の変化を予測するにはどうしたらよいかというような要求を、次の段階で読者が持つようになると思われる。しかしこれらの点に関して、より深い見方・利用法について知りたい人のためには、いくつかの参考書も示されている。一般の多くの人々に一読をおすすめしたい。

（黒沢真喜人）